和田葉子先生との思い出と感謝

井　上　典　子

和田葉子先生は、私が学生時代から今に至るまで、憧れ続けている存在です。大学では英文学科に所属し、英国小説を主に学んでいましたが、アメリカの大学に留学した際に初めて中世英文学に触れ、その世界にすっかり魅了されました。そこから、研究者としての道を目指すようになった私にとって、和田先生は「雲の上の存在」であり、いつか先生のようになりたいという強い憧れを抱いてきました。

和田先生との最初の出会いは、京都大学大学院文学研究科の１年生だった頃、非常勤講師として教えておられた先生の「チョーサーを読む」という授業を受講した時のことです。黒を基調としたお召し物と素敵なロングヘアの黒髪でいつも颯爽と授業にいらっしゃる和田先生は、私だけでなく、周りの研究生にとっても「かっこいい」憧れの先生でした。この授業では、少人数の受講生が順にチョーサーの『カンタベリー物語』を訳出していくものでしたが、私は中英語の発音が上手くできずに訂正されたり、ぼんやりした訳を直していただいたりと、中英語の難しさに四苦八苦しながらも、その奥深さに引き込まれていきました。和田先生はその厳しさと温かさで、中英語という学問の楽しさを教えてくださった、まさに憧れの先生でした。

また、鮮明に覚えているのは、大学院生時代に初めて日本中世英語英文学会の全国大会で学会デビューをした際のことです。1999 年 12 月だったと記憶しています。「*Cleanness* と *Sir Gawain and the Green Knight* における共通点と連続性」というテーマで、これら二つの中英語詩の文体・韻律上の比較を試みる発表を準備しており、自分としては入念に準備をした、かなり完璧な発表だと思い込んでいました。学会の２日ほど前に思い切って和田先生に原稿を見ていただくお願いをしたところ、発表前夜に思いがけない厳しいご指摘をいただきました。そこから一睡もせずに新幹線の中でも修正を続け、発表に間に合わせました。和田先生からは「見違えるほどよくなった」とのお言葉を頂き、諦めずに頑張って良かったと感じると同時に、自分の甘さを痛感した出来事でした。この経験を通じて、私は和田先生のように聡明で、常に輝く研究者になりたいと、強く感じたことを今でも鮮明に覚えています。

その後、私はイギリスに渡り、大学での研究そして仕事に従事する期間が長く続きましたが、その間も先生は常に温かく気にかけてくださり、日本から貴重な助言や励ましの言葉を惜しみ

なくかけてくださいました。そして 2018 年には外国語学部の同僚としてご一緒する機会をいただきました。赴任してからもう 6 年が経ちますが、先生が優しく見守りながら、心から応援してくださる姿に、私は何度も励まされ、研究や教育に対する情熱を新たにしてきました。穏やかで寛容な先生の存在は、私にとって支えであり、目標であり続けました。

また、和田先生は日本中世英語英文学会の会長として、この分野における日本での研究者が減少している中、若い研究者の育成や学会の将来に関する議論を深め、必要な改革を推し進めていかれました。先生の力強い指導力と、研究にかける情熱が学会全体を活性化させ、私たち後輩の研究者も大きな刺激を受けました。

和田先生に大学院 1 年生の時に出会ってから、30 年近くの月日が流れました。そして、一昨年、2022 年 12 月には再び日本中世英語英文学会の全国大会で発表する機会を頂きました。発表が終わった直後に先生から「ブラボー」というメッセージを頂き、私も少しは先生に近づけたのかなととても嬉しく思いました。まだまだ道のりは遠いですが。

和田先生、この度のご退職を心よりお祝い申し上げます。先生とは研究室が近く、法・文研究室 2 号棟の暗い廊下でお見掛けして短いおしゃべりをする機会を楽しみにしていました。それがもうなくなるのかと思うと寂しい気持ちでいっぱいです。どうかこれからもお元気で、素晴らしい新たなステージでのご活躍を楽しみにしております。